駅から町へ

近江鉄道「八日市」

モダンな駅舎「大凧」誇る

広い空の下、二両編成の電車が蒲生野をのどかに走る。レモンイエローの車体が田園にお似合いだ。

JR近江八幡駅からこの近江鉄道に乗り換え、約十五分で八日市駅。

線路はここから、北のJR米原駅にも、南のJR貴生川駅にも延びている。つまり八日市駅は内陸の町・八日市の拠点なのだ。

現在の路線の形が整うまでには近江鉄道の誕生や、同鉄道と八日市鉄道との合併などあったが、明治時代にはもう「ガチャコン」の先輩が、この地で鉄道の歴史を刻みつつ走っていた。

ヨーロッパの山小屋を思わせる三角屋根の駅舎

市名は平成の大合併で「東近江市」に。代わってこの駅が八日市の名を守っていることを見ても、人々が駅や路線に寄せる思いを察することができる。

「一日四、五千人。学生さんや年配者の乗降が多いです」と駅長の山本次男さん。土、日、祝日発売の、何回でも乗降できるフリー切符も人気だとか。

大正建築の旧駅舎が老朽化したので平成十年、ヨーロッパの山小屋のような三角屋根、鉄骨二階建ての新駅舎になった。

一階にはコンサートなどが催せるホール、二階には市管理の二百台収容の駐輪場もある。そんな工夫も評価されて、六年前「近畿の駅百選」に選ばれた。

「一番の特色は、八日市がた飾りが付いている。

毎年恒例の、百畳敷きの大だこを揚げる「八日市大凧まつり」の日には、遠来の乗降客も多く、駅から会場の愛知川八千代橋そばの河川敷まで、祭りの実行委員会によるシャトルバスが運行される。

今年の「八日市大凧まつり」は明日午前から。百畳の大だこを揚げるには百人の引き手が必要で、当日募集される。ミニ八日市大凧コンテスト、各種バザーなどさまざまな催しも用意されている。

駅舎を出て気付くのは、駅前大通りにはスーパーなどもあるのに、風景がゆったりしていること。せわしい人影はなく、第一、駅前の辻にも信号がない。

そのまま駅前通りを少し東へ歩くと、江戸時代の御代参街道（東海道脇往還）との辻になるが、ここにも信号がない。

辻を右折するとアーケードの架かった「ほんまち商店街」＝写真下＝。

伊勢参りの旅人などでにぎわったこの街道の商店街も、真昼のせいか時間がゆったり流れている感じ。

中に「まちかど情報館」の看板を掲げたショップがあった。展示販売のほか、御代参街道や八日市史などについての情報提供コーナーが置かれている。

アーケードを抜けて、ふと仰ぐと、内陸の町なのに空が広いことに気付く。

この空が、そのまま琵琶湖の空ともつながっているのだから、八日市の空はますます広いわけだ。

そうか、この大空があってこその大だこなのか、と納得しつつ、足はおのずと「世界凧博物館　八日市大凧会館」へと向かった。